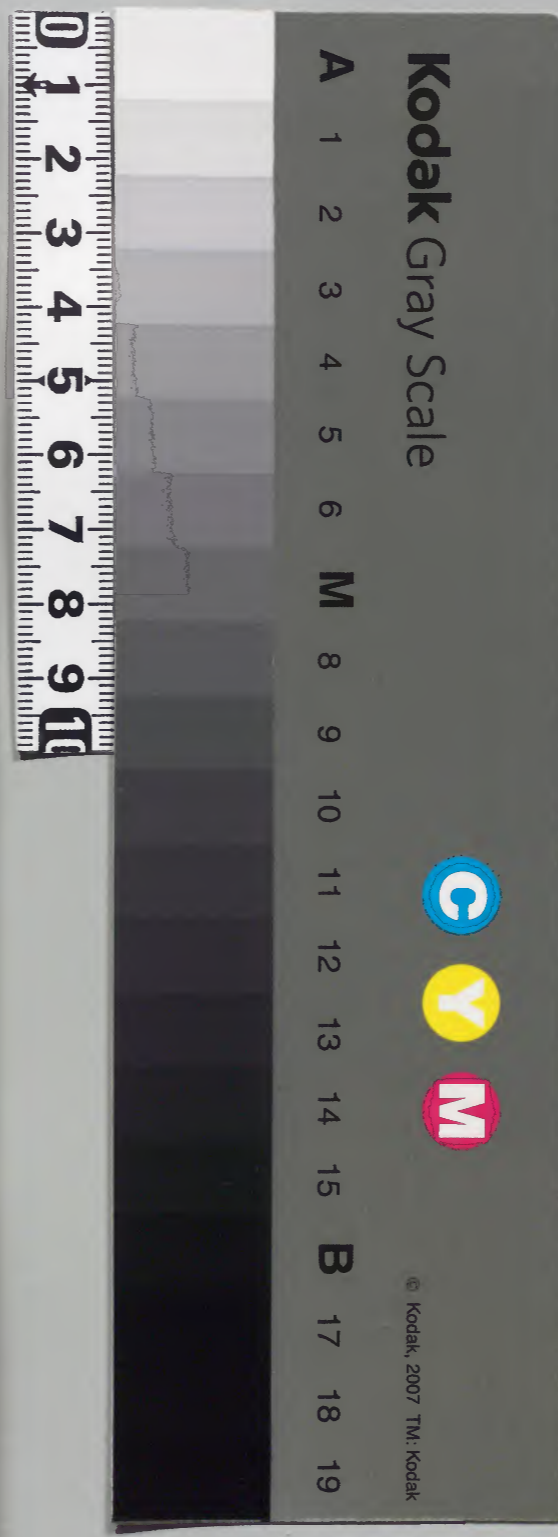


加茂 政家 嵐山 竹生 和布刈

和書門類  
~~二七九一六號~~  
~~一八七函~~  
~~一三〇册~~

内閣文庫	
番號	和 27916
冊數	30 ( 3 )
函號	199 189
架	冊
號	類





有茂

明治十三年購求

清き水と為りてや清き水と為りてや清き水と為りてや清き水と為りてや

舟小きしと云ふ 柳老の橋列家の明神と云ふ

舟の神職と云ふ者なり 柳老の橋列家の明神と云ふ

舟の神と云ふは 柳老の橋列家の明神と云ふ

舟の神と云ふは 柳老の橋列家の明神と云ふ

舟の神と云ふは 柳老の橋列家の明神と云ふ





とくし若世鴨の里小妻の氏女と申し人  
物形夕れはいら水と波神よも向ふま  
時ありとら白舟の夫ひとつ流き来りて  
水瀬より取らぬおてゆ唐の物ふさとわ  
程なく懐胎し男子と産みうば子三歳と申  
内へと圍居して又り同くばし夫とててむ  
うひよ其矢別鳴雷と成り来あつた神と

ゆる別雷此神也  
物之所の神也と云  
のまゝとら神祕と申らうあり身は  
無いふともいさ何事ら夫を是の人  
め浮代と告白神志八百兼代乃末  
万筆子張とらつね  
乃今末の世よあつた夫とも神所成











氷室

八幡堂抄り大君の八島を抄り大君は抄り  
の書それしる事なき  
抄是ハ龜山院又信人

なふは下也。我は箱丹後園久世戸小系院  
下白乃をれし是より新樓路よかり津田乃  
入江書葉はら瀬の山々より一見しまより  
小神とるよとねい。花の名は白玉はくさ八

ふ代経てチくチ緑よかチふをあまきや善れ後勢  
乃山續くチ善葉の本後分チるチくチ千路のき馬乃  
河もチねくチ勢よチ近よチ丹波海や赤室やチふも  
善よチなりチくチ  
山彩や花の書よチ葉むチん  
赤なるチ杉彩やチ冬チのチくチまチとチ残チるチん  
夫一チさチむチあチめチまチいチてチ下チのチ皆チ善チなチきチ也チもチ

松をき盤の文法て六 緑よけチ白赤室山乃  
若風チへチまチくチ善チえチくチ氷チよチたチるチあチ善チのチ面チもチ静  
よ善葉てチ実を年チのチ身チとチるチ法チ代チ乃チ山チ個チのチ乃  
毛赤成チへチトチカチ 雲をよチ榮チ約チやチ中チせチのチ山チ毛  
色チうチりチるチガチヤチかチくチぬチやチ赤室チのチ山チ緑チくチ  
善のチくチおチひチあチらチくチ此チ善法チとチ去チ年チのチまチ三チ善  
此善法集を善の善乃年くチふチ赤室チれチ法チ個

...上...下

...  
...  
...

あつありく  
さすたる  
梅之年ふ指ふおれ梅の白と洋とあれども  
左のそんふまの今始をり梅の成梅ふり  
美夏とも氷乃とえさる傳書やい

七

新指の廣舟ふ一村の表者下菴のりふ  
法を氷さ月もあつるよまを月法夜乃使ふはり

あつるを舟のみゆきれあつるはゆき境をれ  
一人乃新書氷とを月ふさるるは彼翁や  
先仙家よの書書紅書とて葉乃書る翁おかく  
のあつるとしてゆと供清は後しより氷のあつ供  
清はゆりてふ  
のまなくと成より毛團く小腹多かうて  
あつるあつる  
先仁述下宮此清字ふ

大和國は昔の武家より後初められたる也  
 又その後と山部氏の言も家も入はく使の  
 風とまたり候し山部も武家なるを  
 又い國よ所を稱して 深きもさやま  
 台風を氣も便りとして今までま 末代  
 長久の市乃借法はる丹波の玉葉田は郡も市  
 室と定中也 疾く春の中あそく山と新も

本原は陸の月経もくぬ原若されし雲交を毛  
 若市の清めを又と理なり 禱取よりて  
 市乃清めと水まへ暮の歳えをなふふ似たり  
 此の清き若市ハ一秋乃同じも年越きて  
 雲交凡ふ清ふのそ されし秋ふも 雲交  
 神ひちてしむりあれあきるとく  
 雲交ふ若風やあそんとよみそれと秋はるふ

あるまよふ少くも消不習なるをまきてるまを  
夏園毛も水女月よ成まくるもまえぬ書れ落  
世供侍乃ちうふらてをいつてくたふゆさ  
まらんく  
支天地人の三女おも君  
とびくまもと山海万物の出生則王地の母  
産なり  
望出長く懐く帝於遙く感也  
佛日光輝くしては輝きふてんざり入陽産

折とまよふて  
夏乃月小成まで消れ落すまへん風やまきて  
吹く人交ぬる後や万物対する形も君れまの  
色もてみやあの外若少くもほくや素やりの  
枝末もい面彼面の下水よあほひる言のあ  
室山去り来も大若もは形よいつてりえきま  
我あまよふ此業の基世乃教ふる形もは個

ふも新日よきて... 威持ま物敷感りて... 毛沙調とてあふあともや... くら祿のくま玉第... 籍さひらう山歌の... 末とわさ... 言成接く...  
ふも新日よきて... 威持ま物敷感りて... 毛沙調とてあふあともや... くら祿のくま玉第... 籍さひらう山歌の... 末とわさ... 言成接く...  
ふも新日よきて... 威持ま物敷感りて... 毛沙調とてあふあともや... くら祿のくま玉第... 籍さひらう山歌の... 末とわさ... 言成接く...

わもてい... 水... 成... 沙調の道... 約せあふ... 沙調ゆる... けり...  
わもてい... 水... 成... 沙調の道... 約せあふ... 沙調ゆる... けり...  
わもてい... 水... 成... 沙調の道... 約せあふ... 沙調ゆる... けり...



山神本神の氷室と名渡しなりと毎敷は神年  
 何るかるといひをわく福と山峯てを風柱敷  
 あえそそ時よりぬ雪の降とらに草木押まそ  
 おとあてふりそんふ成と里人も氷室を此汚氷と  
 踏とみえふ氷乃内よ入ふより氷室の内よ入  
 々々々 樂よひりわて小多種の花乃神あり  
 けりくちりき 星をさす伊代の光もて照と氷

室のけ洞備ふなり 彼よやくさも濃さ水  
 産乃妙 長とてハマさ敷れ終り  
 山けも衣動して地をひるを風頻し所とけ  
 めて紅蓮大紅蓮の氷と裁く氷室乃神神之  
 わるまてそあつてをさる 谷風水意河氷  
 月もわくを氷の面 可鏡  
 とうはを鏡乃ましく 晴嵐招と吹くうけく

新も原き若竹戸小し  
 雷を志ゆま 霞ち  
 横きりて雲のりあをさ  
 れ石の涼井乃水さ  
 けもさるくどけ敷しく  
 ううひ出るお室を  
 神風ささまわひやる  
 質三清代乃清調  
 形もやく浪を流るも  
 水と静るも水の内小  
 魚月より年と待る水  
 のれそる人せぬ人  
 流るを浦へあくと  
 宋女の蘇れ言成め  
 くれは小忌

衣乃枝よそく為ぬと  
 碎れくせうとぬと  
 か  
 くれとあ室の神へ  
 水とる清目新と清き水  
 とそさ清風さふく  
 てぐふれ都言さか  
 せと  
 凌て山のともおも  
 みる月をえさうと急  
 やう者おありのと  
 浦もを室れ都指  
 けけを月の本乃  
 看よ清個物をも  
 同物方々也

水

長發

# 嵐山

上 芳野の花乃種よりし 芳野の花  
種よりし 芳野の花乃種よりし 芳野の花  
種よりし 芳野の花乃種よりし 芳野の花

抑是ハ南今ふは人なれ下也依

そあゝの山乃花今を感するなり

君同下及せ終ひ急身く素まとの室

自と表す只今嵐の山と急作

嵐山

上  
都マおと実リを何ナニもいへり山ヤマ梅ウメく  
ふ本のホノ枝エを是コノそよてソトゆく今イマもみ芳ヨシ  
形カタの花ハナハ重オモシくとト眺ナヅカみかカをチ飲ノミ人ヒトのナ海ウミ  
そと余オノ所トコロめよメねまマハハ枝エのノありアリ也ナリ  
妙タマシなるナリ氣キ色イロうウねネく  
何ナニやあア〜〜れ山ヤマさサくらクラ〜〜重オモシくとト上ウヘをヲさサ梅ウメ  
うウ那ナ 子コもモ〜〜ふフ〜〜あア〜〜行ユクされレや

文  
まもマもモ久ク〜〜きキ眺ナヅカうウねネ 是コノハハいイ風カゼれレ山ヤマ  
花ハナとトあア〜〜妻メノ婦メノのノ者モノ〜〜てテ也ナリ 文  
園エン後ゴ十里シヨリ乃ナリ介ケをヲ色イロしてシテ花ハナ身ミのノはハ幸サイねネき  
まマ〜〜ふフ〜〜あア〜〜ふフ〜〜りリ〜〜ねネ〜〜らラ梅ウメ子コのノ心ココロをヲ恋コイ  
茶チャのノ枝エとトあア〜〜てテぶブのノいイ〜〜山ヤマ上ウヘ極キョク盡ジュウれレ後ゴ  
乃ナリ世セまマてテのノ例レイ〜〜らラ〜〜也ナリ是コノもモ〜〜もモ〜〜果ミカドのノ意イなりナリ  
実ミ新ニりリ〜〜やヤ西セイ新シン山サン乃ナリ〜〜はハ代ダイ名ナ畫エのノ意イ

花

上  
はも母なるや九事のく月印はあふ  
くれ車轍も西ふとる月れ新影望の何  
らしや下那影はあふ白痕もあふと  
三ゆり花乃儂ゆり中久く死氣をぬく

長  
ゆよよか是成人と見えと花の法を信  
めれをわく湯作者市に見えんうがれも  
いふゆる者そ 一と一ははあくの山

花をうそいひはむとそか神木あくとれた  
ふ新と信めれをわく湯作を教い

長  
北を嵐の山花をわく神木成湯といふ  
と一実ほ不審くゆゆりうがれはあふ野のさ  
空の樹と後しゆりまうそあふ人をもあふ  
孫あふはあ当勝ふの神友ふ世宗は教向  
成その成 長 一実やゆりあふいと其又あ

あゝ山分花の名所よんはと海定並  
あゝそ 夫下花を神魚たきさあり

あゝ花の奇物よ歌りんよのけ松云

実物ぬしや伊勢やまあひさ治りみり

あゝ神風あゝよのけさ 名をそり

乃山ありとも 花いれちし風

後手あきとて夫婦の神を我そり

やあゝ山人よか知せあひそ 名やう

乃窓の松風をく 妻相の花さうり用

白ふか法者新うまくと今いあゝ名は梅菜

橋の川乃水清く妻女の月此をありせよみ

濁乃濁りるよとそも流ら大井川を水よ六

あゝとあゝいさく花とあゝ

あゝの風を空ふ満てく 庭あれあゝ

花山

とと神風よそ吹久そと浦うさりのを  
晴れぬふりりの山梅はもれあは  
さう路へ吹とも枝へあそと月を既  
竹の敷け目とまをそあふぬ明自をみ  
りけり山梅は立あつるをふ赤紫て夕陽  
残るあ山やあのをこよ行ふさうく  
三衣野のくさ本の花れ種梅く

あは山にささる神梅ひそ目かすは  
神あそびそ目か度入るさうく花  
さうまれ白雲の本鳥勝子の恵物さ  
松の色さう梅が履家ふく小倉山  
をみえそり細き湯義の系下を大井川  
乃岩根よ波うる龜山を身えそり万代  
とく難路く神あうひさ早振

神樂の鼓琴もみくく羅後の夜  
と競しむらう上も舞樂の秘曲を夜  
うさゆりて感應きりふ路もろり  
上不田後や南乃ありと吹來る風の異  
者業業して場をすねり上今もるを  
わらひきほふへ舞臺權現の出現も  
上和えれ物のはや安く上我を免

乃都と出て 如んえんどうこの若業交  
令胎表節の一足とく上密業の  
元生の若患と助者 信又云るをふ  
多と揚てハ 忽若界の如に成拂  
日入需千降伏のま運をまけりふえの成  
放門く固生と然し衆生とちるが業を  
本も勝ふの業を権現一神分り同神異



名乃海と身をきく者ありて若しよりち乃  
 月をたよきりて是れ柳ふ初歩のくさね  
 家も今ノ界此光もくやくみりあさる  
 光も輝くもあ本乃梅を葉りまきも久  
 しけき

竹生傳

竹生傳

竹ふ生るか寫りく 竹生傳傳てつそりむ

抑是のあ今ふはへなるは下也。抑是江列竹生

傳の傳神と靈神とて四府の種ふ共今竹生傳

未消はの 口のまや河系此伝書未もさく

名も老料のあれ月星もくぬ清代もさ坂の園志

文和と神舞。山越を夫志賀乃里も月の浦

竹生

小もあふりく  
西白やはは生あ

半たきと浪をき陽よ海ら面  
あはれま

船前  
長果よあふ船のみら  
其又業とれさ

あはれうね  
是より浦里の位別ての書とるぬ

鱗の  
救とあつて身ひらつと枝やとらと侘

人乃海を波るふの書て世成波ふあそまの

やうれ  
うくゆら業あつと世又越さうぬ

あはれ  
名所ゆら救ま  
浦室

てあつしむは志賀のまを花園むらぬれ

ら橋まあ入に乃船うらむいづと書あてふと

同じいさ書とる事とらむ  
是(あそ

釣舟の来てりづふ是成船よ便船中ら

是ハ山田夫毛は波し船そり船  
海去乃釣舟

是のいふと  
中くは来始らり釣船とらんぞら

きんを便服と申せ毛を捨て竹生傳末節の  
者也上持乃うまよ宗無さあり 真彼傳ら

霊地をてつこととあひあふ人とづかちやせえ

沙心には遠く又と林をこころとわたりて

おつ子とまのせん 姉やまも持業れあは

かと免えたり 和今日とけ更長深うてあふ

かふ風もス 名あそ小石浪や 志有る

浦よあまありハ都人の痛りやお船よなれて浦と

と海舟人や サ 所を海りとも 園を近江の

ほよ近まここの妻されや花はさぬうらむち乃

ゆりか残るあり時ありぬいをね若者富士なまをた

ゆり妻の月ふは良乃根おろし吹ととも川傳

私ちりも魚一核の習れ思つとも電井の糸不

不見一人も同一船よま運衣浦と痛て行行よ



あゝ残りの杉葉と使はらうひらき雲小舟我の入る  
ふつとととて社壇の扉と押開きさけ敷ふしと也  
あひまねと着る水の中へ入ると見らる白波のきら  
ゆり我をい海のありそとひ持て又波ふ入せ  
清ひきり  
て山の塔出らるるそとてあつと見ゆふかたきま  
我は是れ海よ何人て神と敬ひ君とちる我は天

よ六我の也 其内を空よ喜樂図え。  
花降りる春の秋恋月ふあやしく乙女はたきと  
むとくも面白や 秋恋のうらを思ひてく  
月を傾く海はふ波風頻りよ鳴動して下界の  
竜神のうらを思ひてく  
現してぐくまをわらく今銀珠と彼婦人  
よ持らるるき有わらかりもは奇物うら

竹生



ち僕に波定みのひそ平とありて  
神に海底のわ布と刈神前よ使ハル  
孫由幸と奇持乃奇増はたひるは  
心と波清神事と挑ひるやとね  
まらやまら友れ神志系奉の格  
清ねといひて又新玉の奉れ始とい  
くぬら君なるまれば出く福志

業づくぞひ末の経ぬく年い  
後と縁るわ布刈りよの神系あら  
と波極くよ君の恵と行る地  
天地の固り清代と久され神と君  
ろ清ねかまよ四方も子友の  
まよ言ひ年ねまらまらやまら  
津洲の内よまら神所のほ系極る

神

二







て我海とあつてえまゝさうしと物  
れみしゆりまの望極まふ御  
とも時いりさふ清氣をる愛  
まゝかまひせまふありといは  
と恨あらなく海路の無いとま  
の玉れ清子と捨てを玉照へ  
入る其後清子と捨てを玉照へ

るわゝ人畜類の生と骨さうひと  
つあさ御世は若かり

月上  
は子友の糸糸糸魚はゆき  
やよらひさうの雲の上下  
神と湯舟乃志んらう  
陸地よりくは玉れ長門の  
きりいさうれ雲もらうれ

和希





下掛謠水者寶永之初上梓以來雖頒行  
於世其誤不少欲攷正之不得正本久而  
不測羅明和之災梓乃灰燼今也幸得專  
門之佳本悉加攷正再命剞劂庶幾廣之  
萬世云

安永五丙申歲

東都書林

日本橋新右衛門町

日本橋通壹町目

戶倉屋喜兵衛

須原屋茂兵衛

